つよきゃらっ！

TAIGA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
つよきゃらっ！

【Ｎコード】
Ｎ５５０８Ｘ

【作者名】
ＴＡＩＧＡ

【あらすじ】
ごく普通の高校生『高中　暁斗』の周りには、とんでもないヒロインばかり！

ワガママ放題やりたい放題の姉『高中　由希奈』

誇り高き最強のストーカー『武蔵野　瑠夏』

心優しい孤独な殺気エンジェル『仲川　皐月』

天然ちゃーはん娘『蕪木　奈々』

元気いっぱいハイテンション爆発娘『羽田　水月』

そんな彼女達に日々振り回される暁斗のドタバタ学園ストーリーここに開幕！！

高中姉弟の朝

世の中には理不尽というものがまかり通っているものだと、高中暁斗（たかなか　あきと）は常々感じている。

例えば今、暁斗の前に仁王立ちしている姉……高中　由希奈（たかなか　ゆきな）がその象徴ではないだろうか。

由希奈は言う。

「暑い！　蝉煩い！ちょうどいいわ　暁斗、蝉を殺しに行くならついでにアイス買ってきなさい！」

……確かに今は夏で、朝とはいえ気温は高く、外で大合唱する蝉達の鳴き声もかなりの物だ。

加えて暁斗は外出しようと玄関に向かってはいたが、それは学校に行く為で、決して蝉を虐殺しに行く為ではない。

「あのさ……朝っぱらから何を言ってんの？　俺が今蝉を殺しに行くように見える？」

暁斗は着ている制服を指で摘むと、呆れ顔で由希奈に問う。

由希奈は腕組みをしながらマジマジと暁斗を眺めると、やや苛ついた様子で口を開いた。

「蝉殺すのに服装なんて関係ないわっ！　要は心意気。そう、心意気なのっ！！」

……言っている事がめちゃくちゃだ。

暁斗は半分諦めた顔で由希奈を見る。

小柄な身体に腰まで伸びた長い髪、そして童顔で可愛らしい顔付きをしている由希奈は、パッと見た感じでは優しそうな女性といった印象を受ける。

実際、彼女が開業している『高中診療所』ではその見てくれに騙された患者が、彼女目当てに足を運ぶという現象が起こっているのだ。

「とにかくさ……俺は学校に行くんだよ。それに仮にも姉ちゃんは医者だろ？　医者が殺す殺す言ってるのも問題じゃないの？　蝉だって一週間しか生きられないんだから簡単に殺しちゃったら可哀想だろ」

暁斗が諭すように言うと、由希奈はいきなり暁斗の目前まで勢いよく詰め寄る。

「なっ！？」

慌てる暁斗。

そんな暁斗の両肩を掴み、由希奈は真剣な眼差しを向けた。

「……暁斗、よく聞きなさい。世の中は弱肉強食。強い者が勝ち、弱い者は淘汰されるの。分かる？　お姉ちゃんはそれを暁斗に学んで欲しいの。ううん大丈夫！　例え暁斗が外で狂喜乱舞しながら蝉を虐殺してその骸を貪り喰っていても貴方は私の可愛い弟。お姉ち

ゃんは決して見放したりドン引きしたりはしないわ？　だから安心して殺戮の天使になりなさい」

「しねぇよっ！！　何で俺がそんな危険なキャラにならなきゃいけないんだよ！　もういいっ！　俺は学校に行くからなっ」

支離滅裂な姉を突き飛ばすと、暁斗は玄関の扉へと踵を返す。

「あーもうアッタマ来た！　お姉ちゃん超頭きたっ！！　こうなったら今日きた患者全員に『それは恋の病です』って言ってやるっ！！」

「いや、それはやめとけっ！　大変な事になるから！　頼むから診察だけらまともにやってくれっ！！」

膨れっ面で暴れる由希奈に慌てて詫びを入れる暁斗。

「……じゃあ帰りにアイス買ってきて。２００円のやつ」

「……はい、よろこんで」

ようやく落ち着いた姉、由希奈に釈然としない気持ちを押さえながら暁斗は玄関の扉を開ける。

……今日も騒がしい一日になりそうだ。

夏の陽射しに目を細めると、暁斗は学校へ向かってゆっくりと歩き出した。

高中姉弟の朝（後書き）

閲覧ありがとうございます。

この作品は、筆者の執筆時間の関係上一頁あたりの文字数が少なめになっております。

長くすると、いつになったら次話投稿出来るか分からず、万が一にも続きを待ってくれている読者様（恐らく居ないとは思いますが）がいたら申し訳ないと思い、少ない文字数で分割しながら投稿させて頂きます事を御了承下さい。

武蔵野　瑠夏の朝

早朝五時。

「……九千九百九十八！　九千九百九十九！　一万っ！！」

武蔵野　瑠夏（むさしの　るか）は日課としている正拳突き一万回を終え、静かに突き出していた拳を下ろした。

その前に三十キロに及ぶランニングをこなしているのだが、瑠夏の呼吸は全く乱れる気配はない。

「さて……朝の鍛錬はこのくらいでいいかな？」

軽くストレッチをしながら、横目で倒れ込んでいる男達見る。

二十人はいるであろう屈強な男達は、すでに息も絶え絶え死屍累々といった状態で、全員横たわっていた。

これは武蔵野流空手道場の庭で毎朝見られる光景で、別段珍しい物でもない。

その中で唯一平然と立っている瑠夏が、溜息混じりで頭を振る。

「全く情けないな。お前達、日頃の鍛錬が足りないんじゃないのか？」

肩で綺麗に切り揃えた髪をかきあげると、やや厳し目の言葉を男達

に投げ掛けた。

すると男達の一人……恐らく武蔵野流道場の門下生なのであろう、鋭い視線で見据える瑠夏に向かって口を開いた。

「し、しかし師範……。流石に三十キロランニングと、前回し蹴り五千回、後ろ回し蹴り五千回、正拳突き一万回のメニューはハード過ぎます！」

そう、この男が言う通り瑠夏は女子高生にして武蔵野流空手道場の師範である。

しかもその強さといったら周囲から『鬼神』と呼ばれる程だが、凛とした真っ直ぐな眼差しと、面倒見の良さから彼女を慕う者も多い。

何より、瑠夏は美人である。

武蔵野　瑠夏の朝２

「それでは私は学校に行かなければならないので自室に戻るとしよう。全員、鍛錬を怠らないように！」

言いながらその場を立ち去る瑠夏。

その、何処までも凛とした後姿に門下生達の誰もが目を奪われた。

生まれてすぐに母親を亡くし、拳聖と呼ばれた父に育てられた瑠夏であったが、その父まで三年前に亡くし、それからというもの若い身空で道場を引っ張ってきたのである。

それだけの物を背おった瑠夏の背中は、計り知れない大きさが感じられた。

「押忍！！」

門下生達はハードワークの為に動かない体に鞭を打ち、瑠夏に向かって頭を下げた。

「……ふぅ」

シャワーを浴び、道場の二階にある自室に戻った瑠夏は部屋に入るなりに深い溜息を漏らす。

「……あ、……あ」

瑠夏は妙な声を上げながら恍惚とした表情で部屋をぐるりと見渡した。

やがてヘタリと力無くその場に座り込む。

「あきとぉ〜！」

瑠夏の視線の先には、部屋中に貼られた大小様々な暁斗の写真。

無論、全て隠し撮りした物である。

「あきとアキト暁斗ぉっ！！」

瑠夏はベッドに置かれた、暁斗の姿がプリントされた等身大抱き枕に向かって、勢いよくその身を投げる。

「はぁ……暁斗」

抱き枕に顔を埋めた瑠夏は、ウットリとした瞳で本日何回目かの『暁斗』を呟く。

「あのな暁斗。今日もるかちゃん朝練頑張ったぞ？えらいぞって頭ナデナデしても良いんだぞ？」

潤んだ瞳で抱き枕に話掛ける瑠夏。

そう、これが鬼神じゃない方の武蔵野瑠夏である。

転校してきた高中暁斗に一目惚れしてしまった瑠夏は、見事にストーカーと化した。

幼い頃から武道しか知らない瑠夏は、その気持ちをどうしたら良いのか検討が付かなかった。

その結果がコレなのである。

「あっ！」

フと時計（暁斗の顔が印刷された特注品）を見た瑠夏が慌ててベッドから飛び起きる。

「もうすぐ暁斗が家を出る時間じゃないか！　こうしてはいられない！！」

瑠夏は驚く程の速さで制服に着替えると、学校……いや、暁斗の住む高中診療所へと向けて走り出すのであった。

仲川　皐月の朝

仲川　皐月（なかがわ　さつき）は、いつもの様に自宅近くの公園へと散歩に来ていた。

手にはビニール袋に入れられた三枚の食パン。

中規模程度の公園には多くの鳩が生息していて、動物好きな皐月は毎朝散歩がてらに鳩達に餌を与えていた。

早朝の公園には犬を散歩させている人達もちらほら見受けられ、その犬を眺めている事も皐月のお気に入りだった。

「ほら、沢山食べてね」

いつものベンチに腰掛けた皐月が食パンを細かく千切ってばら撒くと、どこからともなく鳩達が皐月の周りに群がってくる。

やや茶色がかったセミロングの髪が陽に照らされ、可愛らしい外見の皐月が鳩達に囲まれている姿はとても絵になっている。

「あれ？」

食パンを千切っていた手を止め、皐月は何かに気が付いたかのように前方に目を向けた。

視線の先には公園の外の道を猛スピードで走っていく武蔵野瑠夏の姿があった。

その後にやや遅れて道着を着た男達が続く。
瑠夏に比べ、まるでボロボロのゾンビの様だった。
「武蔵野さんだ……」
皐月は深く溜息を吐く。
皐月と瑠夏は同じクラスである。
活発で、誰からも慕われているいわばリーダー気質の瑠夏は、内気な皐月の憧れだった。
「……お友達になってくれないかなぁ」
そう呟く皐月には実は友達と呼べる人間が一人もいない。
優しく、他人思いで、性格の良い皐月ではあったが、幼少の頃から友達が出来た試しが一度もなかった。
それは高校に入学してからも変わらず、高校二年になった今でも孤独な毎日を送っているのだ。
「はぁ……」
項垂れながら二度目の深い溜息を漏らす皐月。

仲川　皐月の朝２

「…・…・帰ろ」

手に持った食パンを全てばら撒き終えた皐月が、しょんぼりとしながらベンチから立ち上がる。

その時だった。

「おはようございます」

犬を散歩していた老人が皐月に話し掛けてきた。

老人は毎朝鳩に餌を与えている皐月を犬の散歩中に見ていて、心なしか元気がない皐月を心配して後ろから声を掛けてみたのである。

「……！！」

その瞬間の事だった。

皐月の身体が大きくビクンと跳ね上がると、途端に硬直し始める。

ギシギシギシッ！！

そんな音が聞こえてきそうなぎこちない動きで、徐々に首を老人の方へと向ける皐月。

「お、お、お、おは、おはオハオハ……」

奇妙な声を上げる皐月の周囲にある大気が震え出した。

バサバサバサッ！！

大気の異常を敏感に感じ取った鳥達が一斉に大空へと飛び立っていく。

握り締め過ぎた拳からはポタリポタリと血が滴り落ち、噛み締めた唇の端からも一筋の血が流れ落ちる。

その姿はもうこの世の者とは思えない恐ろしさで、事実声を掛けてくれた老人はとうに腰を抜かし、金魚の様に口をパクパクさせていた。

ちなみに連れていた犬は、とっくの昔に逃げたしていた。

そうしている間に、今や夜叉と化した皐月の身体からドス黒いオーラが立ち込めてくる。

それは殺気と良く似ていた。しかも莫大なものである。

「おおお、おはオハッ！　おはようございますっっっ！！！　……って、あら？」

ようやく皐月が挨拶を返せた頃には、老人の姿はもうそこに無かった。

それどころか、皐月の半径１００ｍに動く物の姿すら見えなくなっていた。

これが皐月に友達が出来ない理由である。

極度の上がり症、赤面症である皐月は、他人と接した時に緊張のあまり絶大なる殺気を放つ。

それに恐れをなした人々は、皐月に恐怖心を刻まれて近寄らなくなってしまうのだ。

「はぁ……またか」

いつもの結果にガックリと肩を落とし、皐月は学校の支度をすべくトボトボと家へと帰って行った。

蕪木　奈々の朝

「ふわぁっ！？」

叫びと共に勢い良くベットから飛び起きると、蕪木　奈々（かぶらぎ　なな）は肩で息をしながら部屋を見渡す。

「夢……か……。良かった…．…．」

額から流れ落ちる汗を手で拭うと、安堵の表情を浮かべた。

酷く恐ろしい夢だった。

奈々は己がみた悪夢を思い返し、あまりの恐ろしさに身震いする。

もし現実に夢でみた様になってしまったのならば、奈々は生きていく自信がない。

奈々は呟く。

「ちゃーはん……」

奈々がみた悪夢とは、この世から全ての炒飯が消えてしまう夢。

そう、蕪木奈々は無類の炒飯好きなのである。

奈々を知る人々は、彼女が炒飯以外を食べている姿を見た事がないと口を揃えて証言する。

すっかり目が覚めてしまった奈々は、もそもそとベットから抜け出すと、机の上に置かれた写真立てを手に取ってニコリと微笑む。

「おはようさんです。　ちゃーはんさん！」

写真立てには出来たての五目炒飯の写真。

無駄に高画質である。

朝の挨拶を済ませた奈々は、部屋を出るとリビングまで移動する。

母が朝食の用意をしているのであろう、キッチンから良い匂いが漂っていた。

「おはようさんです。お母さん」

「おはよう奈々。もうすぐ朝食が出来ますから、椅子に座って待ってて下さいね」

奈々の母親である朱理（あかり）はにこやかに娘に微笑むと、大火力で中華鍋を振るい始めた。

蕪木　奈々の朝２

「ふおおぉっ！　お母さん凄いです！　炎です！　炎を完全に従わせていますっ！！」

我が母の鍋捌きを眺めながら、異様に興奮する娘。

「ふふふ……　大丈夫よ奈々！　貴女もいつか炎を自由自在に従わせる事が出来るわっ！　だって、貴女は私の娘ですもの！！」

言いながら朱理は一際大きく鍋を振ると、黄金色に輝く……炒飯がキラキラと輝きながら宙に舞う。

そして炒飯は朱理が素早く構えていた皿の上に綺麗に乗った。

「ふおおおおっっっ！！　お母さんっ！　お母さんっっ！！」

奈々のボルテージは最早ＭＡＸである。

朱理は朱理で、炒飯が乗った皿を持ったままクルリと回転すると、ビシッとポーズを決めていた。

「さあ召し上がれ」

その後大人しくテーブルの席に着いた奈々の前に、朱理特製五目炒飯が置かれる。

キラキラ輝く炒飯をうっとりと眺めていた奈々は、やがて神妙な顔

付きに変わり始めた。

「お母さん……」

「ん？　どうしました？」

奈々の対面に腰を下ろした朱理が優しく微笑む。

奈々はもじもじと身体を揺すりながら口を開いた。

「ちゃーはんさんが愛し過ぎて生きていくのが辛いです……。お母さんはそんな事ありませんか？」

「ないから安心しなさい」

「……そうですか」

娘のおかしな質問にも、変わらずの微笑みを絶やさない朱理の返答に、何故かホッとした様子で五目炒飯に箸一（蓮華）をつける。

「ふおおっ！　最高ですっ！！　完璧です！あえて言うならば完璧です！」

五目炒飯を一口食べた奈々は大きな瞳をより一層大きく見開くと、歓喜の声を上げた。

「完璧を二回言いましたよ？　それでね、奈々。さっきの質問なんですけど、お母さんの意見を聞いてくれますか？」

「ふぁい？　なんれすか？」

狂喜乱舞しながら五目炒飯を食している奈々に、朱理は飽くまで優しい口調で語り掛ける。

「奈々は言いましたね？　ちゃーはんさんが愛し過ぎて生きるのが辛いと。でもね？　生きていなければ、奈々は炒飯を食べる事が出来なくなってしまうのですよ？」

「ふおっ！？」

瞬間、奈々のバックに稲妻が走った。

すでに食べ終えた五目炒飯の器に蓮華をおくと、茫然自失といった感じで天を見上げる奈々。

「そうでした……。辛くても生きていなければ、私の全国ちゃーはんさん制覇が成される事はないのでした……」

そんな奈々の様子を見て、朱理はクスリと笑う。

「でしょう？　それならば頑張りなさい！　さあ、そろそろ支度をしないと学校に遅刻してしまいますよ？」

朱理がチョイチョイと指で時計を指すと、奈々は慌てて立ち上がった。

「ふおっ！　もうこんな時間ですか！？　流石ちゃーはんさん！時が経つのも忘れさせます！！」

奈々は朱理にご馳走様をすると、急いで身支度を整え、家を飛び出

していった。

羽田　水月の朝

規則正しく時を刻み続ける目覚まし時計の針が、アラーム設定された時刻に近づいていく。

「とうっ！！」

今正にその能力を発揮しようとしていた目覚まし時計にチョップを喰らわし、目覚まし時計の最大の能力であるアラームの発動を阻止する人物がそこにいた。

それはこの部屋の主、部屋にあるのも全てを支配する言わば絶対神、羽田　水月（はだ　みつき）である。

「ふふ～ん！　やってやったですよ？　毎朝毎朝私を苦しめる目覚ましに、正義の鉄槌を食らわせてやったですよ！」

アラーム設定された時刻を過ぎて、今やただの時計と成り下がった目覚まし時計を眺めながら、水月は不敵に微笑む。

「完全勝利っ！！　遂ににっくき目覚まし時計に勝利した水月ちゃんなのであった！！」

両拳を高く突き上げ、勝利の喜びを体全体で表した水月は、そのままの体制でベットへと倒れ込んだ。

「さてさて～早起きもしてしまったし、時間に余裕もあるなぁ？　どっしよっかなぁ？　などと言いつつ、戦いの後の休息をとる水月

ちゃん！」

独りで戯言を呟きながら目を綴じる水月。

彼女の呼吸が寝息へと変化するまでに五秒掛からなかった。

ちなみに、水月は別名『遅刻魔』『カリスマ遅刻師』『呼んでも来ないバハムート』等と呼ばれ、『千の異名を持つ女』の称号を欲しいままにしている。

完全に夢の彼方へと旅だってしまった水月の至福の時間は、学校の始業時間五分前まで続くのであった。

羽田　水月の朝２

「…　……　…うそ」

夢の世界のミラクル大冒険から帰還した水月は、無情にも現実の時を告げる目覚まし時計を凝視しながら呟いた。

「うそうそうそうそうそっ！　ヤバイじゃん！超ヤバイじゃんっ！！　遅刻だよ？　完全に遅刻だよコレ！！」

あまりの衝撃に気が動転しているのだろう水月は、目覚まし時計を持ったまま立ったり座ったりを繰り返す。

「うぬぅ……目覚まし時計め！　あたしに敗北したからといって卑劣なマネを……！」

１００％自分の責任なのだが、その事実を棚に上げながら急いで制服に着替える水月。

「あぁもうっ！　髪ボサボサじゃんっ！」

言いながら慣れた手付きで水月のトレードマークであるポニーテールを完成させると、足早にリビングへと駆け出す。

「ママッ！　どうして起こしてくれなかったの！？　おかげ様であなたの可愛い娘さんが今まさに大ピンチ……って、アレ？」

リビングに繋がるドアを開けると同時に文句の矢を飛ばした水月の

動きが止まる。

リビング、キッチンには誰の姿も見えないのだ。

「んんん～？　何コレ？」

設置されたテーブルの上に置かれた紙に気が付いた水月は、それを手に取ると、しげしげと眺める。

『水月へ。
　暑いからパパと二人でちょっと旅行に行ってきます。
　朝御飯は用意してあるのでチンして食べてね！』

「……」

一通り手紙を読み終えた水月は、無言で手紙の横に置かれていたコーンフレークに視線を移す。

「チンしてって……どないせぇっちゅ～んじゃ」

見事両親に置き去りにされた水月であったが、自由人である両親のこの行動にはすっかり慣れてしまっている。

「まっいっか！　コーンフレークは世界の朝食～」

コーンフレークを器へと移した水月は、鼻歌交じりで冷蔵庫の扉を開いた。

その瞬間、開けた扉を勢いよく閉める。

「牛乳ないじゃんっ！！」

冷蔵庫の中には塩辛の瓶しか入っておらず、水月は怒り心頭である。

「牛乳がないコーンフレークなんて世界にはとても及ばないよっ！
せいぜいセ界！　セントラルリーグだよっ！！」

意味不明な言葉を発しながら器に盛られたコーンフレークを指差す水月。

やがてハッと我に還ると、遅刻確定な現実を思い出す。

「わわわっこうしちゃいられないっ！　行かなきゃ！　可憐に優雅にダイナミックにっ！！」

水月は喚き散らしながらカバンとコーンフレークを手に取ると、大慌てで家を飛び出して行った。

登校風景

「まったく……我が姉ながら困ったもんだな」

家を出た暁斗は頭を掻きながら独り言ちる。

あれで医師が務まるのだから世の中不思議なものだ。

「……ん？」

そんな事を考えていた矢先、何かに気が付いた様子の暁斗が歩みを止めた。

物音がする。

それは高中診療所の横、ゴミ置き場として利用しているスペースから聞こえてきた。

ゴミの回収日までの間一時的に保管しておくそのスペースには、稀に野良犬や鴉等がゴミを漁りに来る事がある。

ガサガサとゴミ袋を漁る様な音から察するに、また動物達が荒らしに来ているのだろう。

「ったく、朝っぱらから勘弁してくれよ。後片付けが大変なんだから！」

暁斗はゴミを漁る動物を追い払うべくゴミ置き場へと向かい始める。

「え？」

ゴミ置き場に近づくにつれ、ガサガサとゴミ袋を漁る音と共に、聞き覚えがある声が耳に入ってきた暁斗が再びその歩みを止めた。

「……こんな所にゴミを置いておくなんて仕方がない奴だな暁斗は！　私だから良い様なものの、もし変質者がゴミを漁りに来たら一体どうするつもりなんだ！」

そこにはブツブツと文句を言いながらゴミを漁る人物がいた。

武蔵野瑠夏である。

「世の中にはストーカーや変態が山程いるからな！　やはり私が監視して守ってやらねばならないか……。フフッ！　暁斗め、私がいないと何も出来ないんだな？　可愛い奴め」

ニヤニヤしながらゴミを漁る瑠夏は、完全にただの変質者にしか見えなかった。

その時、瑠夏が一際大きな声を上げた。

「おおっ！　こ、こ、これはっ！　暁斗の使い古しのトランクスじゃないか！！」

まるでゲームの主人公がお宝アイテムを発見した時の様に、高々と空に掲げて歓喜する瑠夏。

「これは…　…こんな……どうしよう……し、辛抱たまらんではないか！！」

迷わず瑠夏はトランクスに顔を埋め始める。

「……武蔵野？」

「……あ」

我慢も限界にきた暁斗が引き攣りながら声を掛けると、驚いた表情の瑠夏が振り返る。

登校風景2

暫しの沈黙の後、瑠夏は静かに立ち上がると、制服のスカートに付着した埃を手で払いながらニコリと微笑む。

「おはよう暁斗。偶然だな？　折角だから一緒に登校しないか？」

「こういうのは偶然とは言わん！」

さながら何事も無かったかの様に振る舞う瑠夏に、暁斗が思わずツッコミを入れる。

……が、当の本人は全く気にしてすらいない様子だ。

それどころか不満顔で暁斗を睨み付けている。

「暁斗はいつまで私の事を武蔵野と呼ぶんだ？　そんな他人行儀な呼び方では寂しいだろ！　別に私は嫁とか家内とかカミさんとかハニーとか呼んでくれても全然構わないんだぞ？　というか、寧ろ望むところだ」

「ちょっと待て！　それ全部呼び方は違うが意味合いは一緒だろっ！！　……もういい。俺はもう行くからな」

付き合っていられないと言わんばかりに背を向けて歩き出す暁斗。

「あっ、待てっ！　分かった！　せめて名前！　名前で呼んでくれ！　今はまだそれで我慢するからっ！！」

手にしっかりと握り締めていたトランクスをカバンにしまうと、瑠夏は慌てて暁斗の後を追う。

毎朝無理矢理な設定の偶然を装い待ち伏せる瑠夏と一緒に登校するのは、暁斗にとってはもう当たり前になっていた。

暁斗は思い返す。

『暁斗！　お姉ちゃんは一人じゃ寂しいから引越してきなさいっ！！　断わるなら一生地味な嫌がらせを受ける覚悟をする事！　いいわね？』

元々決して都会とは言えないこの小さな田舎街で診療所を開業していた姉　由希奈は、遠く離れた都会に住む親許で、高校生生活を送っていた暁斗をその一言で転校させた。

由希奈はやると言ったら本当にやる女だという事を、暁斗も両親も嫌というくらい思い知らされていたのである。

そして転校してきた二日目から、三ヶ月に至る現在まで、瑠夏に付き纏われ続けている。

登校風景3

「なあ暁斗、一つ聞いてもいいか？」

暁斗の横まで追い付いた瑠夏が、やや聞き辛そうに口を開く。

「何だ？」

「いや、以前から頻繁に暁斗の家に忍び込んでいたんだが、御両親の姿を御見かけした事がないものでな？　少し気になっていたんだ」

問題発言をサラリと口にする瑠夏。

無論、暁斗にとっては聞き捨てならない事である。

「何をさも当然な事みたいに言ってんだよ！　犯罪だろそれ！？　いつだ？　いつ忍び込んでんだ！？」

猛烈な勢いで喰って掛かる暁斗だが、瑠夏は涼しい顔で人差し指をチッチッと横に振る。

「暁斗、今大事なのはそこじゃない。御両親の件だ。このままだと私を紹介する時に困るだろ？　未来。そう、お互いの未来に関わる重要な事なんだぞ？」

「……」

瑠夏といい、姉といい、どうして自分の周りには何を言っても無駄な人が多いのだろう？

暁斗は全てを諦めて話を続ける事を選択した。

「俺の親は離れて暮らしてるよ。俺だけ姉貴に呼ばれて強引に転校させられたからな」

「……そうか」

事情を聞き、瑠夏は神妙に頷く。

「では、今は暁斗と御義姉様と嫁である私の三人暮らしという事になるな？　手に手を取り合って頑張っていこうではないか」

極上の笑顔を咲かせる瑠夏。

「何でそうなるんだ！？　いつお前が嫁に来た！　それと御義姉様とか呼ぶなっ！！」

「……！　ちょっと待て暁斗！」

そんなやり取りを繰り返していた時、突然けたたましいクラクションの音が響き渡った。

二人は会話を止め、咄嗟にクラクションの音がした方へと目を向ける。

登校風景４

「危ないっ！！」

視線の先は車道。

そこに歩道を歩いていた一人の女性が、フラフラと吸い寄せられるように飛び出して行ってしまったのだ。

女性の目前には中型のトラックが迫っている。

突然の飛び出しに、トラックの運転手はクラクションを鳴らしながら急ブレーキを踏むが、元々スピードを出し過ぎていた為に止まりきれない事は誰が見ても明らかだった。

大惨事が起こる。

誰もがそう思った。

暁斗も思わず目を背ける。

この位置から現場までは１００ｍ近くある。どうあがいても女性を救出する事は不可能だ。

そして周囲にいた人間もまた、金縛りにあったかの様に動く事が出来ないでいた。

その時である。

周囲のざわめきに、暁斗は横に居たはずの瑠夏の姿が見えない事に気が付いた。

「武蔵野！？」

ハッと車道へ視線を戻すと、すでに女性とトラックの間へと到着している瑠夏の姿がそこにあった。

しかし、女性を抱えて救助するには時間が無さ過ぎる。

このままでは瑠夏まで一緒にトラックに巻き込まれてしまうだろう。

「……！！」

暁斗は思わず走り出した。

今更間に合わない事など分かっている。

しかし、考えるより先に体が動いてしまっていた。

その刹那、瑠夏の怒号が響き渡る。

「武蔵野流ーーー」

言いながら左足を思い切り踏み込んだ瑠夏の足元のアスファルトが、その衝撃に耐え切れずドゴンッと音をたてて陥没した。

「鉄閃掌っ！！」

次の瞬間、腰、肩、腕と見事な捻りを加えて突き出した瑠夏の右掌底が、迫ってきたトラックの前面に触れる。

ドオンッ！！！

壮絶な衝突音が聞こえたかと思うと、トラックは縦に大きくバウンドしてその動きを止めた。

「スピードの出し過ぎは感心しないな」

ゆっくりと右手を下ろす瑠夏。

これが数々の格闘技大会で優勝を総ナメにし、いかなる試合でも不敗を誇る『鬼神』武蔵野瑠夏の姿である。

「む、武蔵野！」

目の前の信じられない出来事に唖然とする暁斗。

瑠夏は暁斗に振り向き、ニッコリと笑う。

「武蔵野ではなく『瑠夏』だろ？　暁斗」

その表情は、すでに鬼神から暁斗命の瑠夏に戻っていた。

登校風景5

「よっこらしょっと！」

大騒ぎになっている車道を尻目に、瑠夏は放心状態の女性を抱えて颯爽と歩道で立ち尽くす暁斗の許へ戻ってきた。

「お、おい、大丈夫か？」

やや動転気味の暁斗の言葉に、瑠夏は微笑みを返すと静かに抱えていた女性を地面に降ろす。

瑠夏も女性も全く無傷な様だ。

「あれ……お前…．…」

暁斗は降ろされた女性の顔を確認すると、驚きの声を上げる。

「蕪木？　蕪木じゃないか！？」

救出された女性は蕪木奈々。

暁斗や瑠夏と同じ学校の生徒である。

「ふおぉ？」

ボーッとしていた奈々は、暁斗の声にピクリと反応すると、大きな瞳を暁斗に向けた。

「おや、高中くんではないですか。おはようさんです」

のほほんとした声で挨拶をする奈々。

それは直前にトラックに撥ねられそうになっていた人間が出す声とは思えない程、呑気な挨拶だった。

「な、何だ暁斗？　し、知り合いなのか？」

言葉を交わす二人を見て、瑠夏は眉をひそめる。

恐らく、自分以外の女性と話しをしている事が引っかかっているのだろう。

「ああ、同じクラスのやつなんだ」

「蕪木奈々です。よろしくです！」

にこやかにペコリとおじぎをする奈々。

それとは対照的に表情を強張らせる瑠夏。

「ななななな何だと！？　お、お、おお同じクラスだとぉっ！？」

ワナワナと肩を震わせる瑠夏は2年B組。

暁斗と奈々は2年C組で、瑠夏とはクラスが違う。

「……そうか、ならば仕方ない。残念だ……非常に残念だ」
瑠夏はゆらりと奈々に近づくと、そのまま担ぎあげて車道へ向かい歩き出した。
「おいちょっと待てって！　何が仕方ないんだよっ！？　非常に残念って何！？」
怪しい笑みを浮かべながら奈々を死地へと誘う瑠夏を、暁斗が必死になって止める。

「蕪木、大丈夫か？」
悪鬼と化した瑠夏から何とか奈々を奪還した暁斗が心配そうに尋ねると、奈々は特有のふんわりした笑顔で大きく頷いた。
「大丈夫ですよぉ。心配してくれてありがとさんです！」
そんなやり取りを膨れっ面で睨みつけている瑠夏は、フと思い付いたように両手を胸の前でポンと合わせる。
「ああっ！　痛ぁいっ！！」
いきなりオーバーアクションでその場に倒れ込む瑠夏。

そしてチラチラと暁斗を見ながら大袈裟に左足首を摩る。

「どうやらさっきので足首を捻ってしまったみたいだ！　これは惨事！　乙女の大惨事だ！」

「蕪木、どこも怪我とかしてないのか？」

「うん。平気です！」

そんな瑠夏には一切目もくれず、二人のやり取りは続く。

「おい、暁斗？　あぁーきぃーとぉー！　ここだぞー？　お前のマイスイートハニーがここで倒れてるぞー！　こっち向けー、ちょっとこっち向けー」

手招きと自分を指差す動作を繰り返す瑠夏だったが、それでも放置。

「立てるか？　無理するなよ？　一応病院行くか？」

「大丈夫、ありがとさんです！　遅刻してしまうので行きましょう」

暁斗は奈々の手を取り立ち上がらせると、そのまま二人で歩き出した。

「あぁーきぃぃーーとぉぉぉーーー」

哀れ置き去りにされた瑠夏。

「……クスン」

しょんぼりと立ち上がった瑠夏は、トボトボと学校へ向かう二人の後を追い始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5508x/

つよきゃらっ！

2011年10月27日09時09分発行